

小児精神病院における障害児(者)の遊びの研究

—粘土遊び—

○岩谷 清子 大庭 千鶴子 仲園 道子 高橋 富士枝
(東京都立 梅ヶ丘病院)

I はじめに

子どもは、遊びの中で多くの経験を積み、成長、発達してゆく。生き生き遊ぶ姿こそ、本来の子どもの姿であり、保育の場において、遊びは、指導の中心的役割を果たしている。

梅ヶ丘病院に入院している患者は、その年齢が、3才から30才に及び、重度の精神発達遅滞と情緒障害を伴い、多動、あるいは、動作が緩慢、その他多くの問題行動を持っている。子ども達の多くは、自らの力では、遊びを進展させることができない。その為、行動範囲も狭く、問題行動の改善が、非常に難しい。そこで、この子ども達の遊びの援助方法を探る為、昭和50年度より、色々な素材を使い、遊びの研究に取り組んでいる。今回は、その中の、粘土遊びについて報告する。

II 研究目的

泥粘土は、重量感と可塑性があるので、重度精神発達遅滞児(者)には、とりつきやすい素材であると思われる。この素材を用いて、適切な援助を行えば、遊びが拡大し、情緒の安定、問題行動の軽減、成長、発達に役立つと考える。ここでは、年齢と症状の異なる3名を選び、援助方法とその効果を探った。

III 研究方法

①対象児及び指導目標

(表1)

児	診断名	性別	特徴	問題行動	保育のねらい	造形のねらい
A	精神発達遅滞	男	行動異常	行動異常	ダイナミックな遊びを通して自分の関心を広げる	粘土に興味をもつ積極的遊び
B	精神発達遅滞	男	感覚レベルとどうも	感覚レベルとどうも	遊びを通して意欲を高め、発声する	基本動作の全体がどきぶようになる
C	自閉症	女	固執性が強い	固執性が強い	自ら遊ぶようになる	基本動作がどきぶようになる

②研究期間

昭和55年4月～昭和56年3月

③指導方法

- 個別カリキュラム作成—特徴、レベル、興味、目的に含ませて設定。
- 目的に沿い、毎回チェック項目に7才打ち合せ視点を統一し、観察用紙へ記入(当日配布)
- 援助方法を、各自の保育及び造形のねらいに沿って明確化する。

D対人関係の重視—特に関わる職員とのコンタクトをとる。子どもは、3名をグループとし、1対1で関わる。

E素材及び環境条件を同一に設定

以下、3例について、経過を通し、援助方法の種類と表児の反応を列挙し、結果を考察する。

IV 指導経過及び結果(表2)

A—本児の要求した物や興味を示している物を職員と一緒に作ることを、指導の基本とした。手に触れることさえ嫌だった粘土であるが、好きな物を作ったり床に思いっきりたたきつける等の遊びを通して、自ら粘土へ手を出し、こねる、伸びの動作を行い、言葉かけにより集中時間も長くなり、安定し課題に取り組みはじめた。途中、指導者の交替や投薬変更などで、課題集中できず、ひっくり返しが激しくなったが、本児の状態を観察しつつ粘土に触れさせることを、継続指導した。状態が落ちついたところで、ひっくり返しに対しては、厳しく注意を与え、課題を次々に提供すると集中して取り組んでいた。この事は、本児の中に、一つのけじめができ、自分の意志をコントロールする力がついたと考えられる。全国を通し、病棟外へ行く事を喜び、楽しんで遊ぶ姿も見られた。積極的に物を作り出す迄には至らなかったが、職員の指示に応じようとする態度が定着した。これら、気分が安定が、次の課題への発展を可能にすると思われる。

B—本児の発声は、自己表現の一つとして考えられるが、習癖化したつみり、苦手を活動する姿が見られる。拒否の手段としてしていることが多い。本児の好む動作を課題への導入の一つとして配慮したが、結果はマイナスで、その動作に固執しがちとなり、立歩きが多くなった。粘土の質も、本児の遊び方に影響した。粘土に水を加え、軟らかくすると、水に色を取られ、感触を味わうの外に終ってしまう。粘土を硬めにし、指導内容も課題動作とし継続した。この結果、集中時間が長くなり、開始前や取り組み後に発声がある時でも、課題が始ると、次第に落ちつき、回を追うごとに発声が減少し、安定して取り組めるようになった。丸める、叩いて平にする、重なるの動作は、手をそえて、2・

3回動作した後、声かけだけに可るが、一人で行う事もあった。本人の目的意識的動作は少く、指示でやると応じる程度である。好きな素材だ、下手もみり、全回を通し、取りつき良好で、自ら粘土のバケツを手にすることが多かった。本児の発声は、課題提供を躊躇する要素となっていたが、要求の表現として捉え、指導した事、安定に繋がったと思われる。粘土遊びの内容を、基本動作の3点にしぼった事、より集中したと考える。

C一硬めの粘土を提供するが、とりつきが悪い為、軟らかい粘土に替え水。手型や腕になる算の遊びより導入し、徐々に、硬い粘土へ移向した。職員が手をそえ、棒状を作ったり、ちぎる、手の平で叩く等の動作をした後、目の前に粘土を置き、優しく言葉かけで動作を指示すると集中した。丸める動作も自分で行えるようになった。その後は、自ら粘土へ手を出さず、の、穴をあける、ちぎる算、パターン化した遊びが主体となった。他の動作を指示すると、拒否反応が強い為、このパターンを利用し、レリーフ遊びを設定した。平たい粘土へつけた模様は、指で穴をあけ、ちぎった粘土を貼る遊びは、本児の興味をひき、取り組みを良くした。職員の交替で落ちつかず、ちぎる、貼る遊びに終始しがちだった。遊びを発展させる為、基本動作を促すと、強い指示には応じるが、表情は芽えなかった。全回を通じ、病棟外に行く事は喜んでいたが、粘土への興味は薄かった。母の動作を取り入れた課題には、一時集中も見られ、今後の指導の手がかりとなる。

①強力な働きかけは、動作の習得と表現方法を変化発展させるが、反応は様々で、遊びへの取り組み態度には、良否がみられる。各自のレベルと特性を十分に把握して対応する必要がある。例えば、Aのように、行動異常を伴う場合は、問題行動を許容し指導するより、制止した方が、より遊びに集中した。Bのように、感覚遊びの段階にある子は、わら、い多目的にせり、基本動作1点にしぼると課題に集中しやすい。Cのように、固執性の強い子に、そのパターンを、他の動作へ発展させようと、基本動作を指示し、反復させると、返り、落ちつかず、取り組みが悪くなった。

②対人関係では、その反応が、3人共同で、子ども同志には、関心を示さないが、職員に対しては、強い関心を示した。特に、職員が交替すると、どの子も小泣きしたり、落ちつかない、課題集中にこたえて、マイペースとなった。

③粘土への取りつきを良くするため、水を加え糊状

にした方がよかった。しかし、感触遊びのみになりがちの為、徐々に水を少くし、形作り可能な状態に戻した方が、遊びへの集中に効果的である。

④3名共、自ら形作るまでには至らなかった。はじめは、手をそえ、金介助だったが、徐々に介助を少くして、声かけで、動作全体を促したり、或いは部分的補足させるように、言語指示と動作指示を併用し用いる方がより効果的である。

⑤この遊びを通して、問題行動を改善させるのは難しい。しかし、集中している時は、3名共減少しているので、改善への糸口はなっていると考える。

結果(表2)

援助方法		A	B	C				
動機づけ	興味・特性を生かす	○菓子・車・机・バツ ○を作る。(他)	X 感触動作のみ	○土台を作る(穴は) ○棒状にする(手)				
	雰囲気づくり	○シートをかき、机 X 遊び好きな歌をひ	○静かに可る	○室内に物置か X 遊具がある(集中)				
	ほめる	○作品を褒める(れい) 興味ない物は通す	○短い発声 ○良い表情	X 興味がない(れい) 通じない				
	粘土の質	X 硬い(かき)持た 息を吸って(り)ね	○硬めに可る X フォン(状)	X 硬め、○軟かい ○上記より通す				
	部分補足	○バス、机の指を 作し、腕の作を指	X 作品には、無 関心	○具の手に指を貼る ○手前を指す(れい)				
動作指示	全介助	○作りの指を指す	○叩く、丸める	○丸める				
	半介助	○部分補足	○丸める	○丸める				
	模倣 注視	○要求(下物)作 て見せる	○手前、穴を指す ○眼の前に通す	○立って作(れい) ○手前を指す(れい)				
言語指示		○作りの指を指す X 興味ない(れい)作	○動作指示(れい) X 言語指示のみ	X 強いとは(れい) 落ちつかず				
	制止	○控える、蛇口(れい) X 手前を指す	○発声、○水 ○	X 自分勝手な行動 ごし(れい)				
問題行動	許容	X 控える、(れい)通す 泣き止み、(れい)おさ	X 好きな感触動作 ○発声	○好きな(れい)通す X (れい)おさ				
	基本動作	1. ちぎる 2. 叩く 3. 伸可 4. こねる 5. 直ねる 6. 丸める	○ 1~6 ○ 3種類(れい) ○ 1. 2. 3. 6	○ 1. 2. ○ 3. X 1~6 反復練習 表情悪く不安定 泣く				
結果	対人関係	無針	5/10	4/10	6/12	10/12	3/9	6/9
	表情	発声	7/10	10/10	10/12	8/12	5/9	3/9
	身体数	集中	4/10	5/10		7/12		6/9
	完成した作品	バス、ドーナツ、机 バツ、エスケー、他			基本動作・1. 2. 3. 6.		魚・一作品に興味 なし(ドーナツ作り)	

⑥ まとめ
この研究を通して、私達は、素材の特性をよく知り遊びを発展させるための技術を身に付け、楽しみながら一緒に行う事の大切さを學んだ。